

2009年9月20日（日）～22日（火）

## 神々のルーツ・亀岡元々めぐり

富士文庫 日本の二大神都（大）国常立尊の都 桑田の宮編



青年研修会「元々巡り」を終えて

青年会 望月幹巳・出口恒

教えの根本霊場・高熊山が鎮座する亀岡——出口王仁三郎聖師はその地名の由来を「鏡の岡」「神の岡」と示されましたが、ならばそこには世界の諸宗教「神儒仏耶」の同根を示唆する痕跡が現存するのではないだろうか？ そのような視点で、わたしたちは『霊界物語』と『新月の光』に導かれ、古代の謎を秘めた「桑田の宮」伝承を軸に、神々の御跡を訪ねる研修会を開催しました。

今回は松山、長野、東京などからの一般参加者が半数以上を占め、修験道の体験者や年間に二百もの寺社めぐりをされる方など、個性や知識も豊かな方々

が多く、また長野から参加された女性は四才のお子様連れとあって、終始和やかな雰囲気醸し出され、バラエティに富んだ二十三名参加の研修会は大いに盛りあげられました。

また小幡神社の宮司で京都大学名誉教授・上田正昭先生からは、聖師や小幡神社の由来など歴史的なお話を伺い、さらにテーマにそって、秦氏について等「元々」に関するご質問に答えていただくことができました。

### 研修を振りかえって

今回の研修準備で、聖師が『新月の光』において、神々につながる系譜を知る上で大切であるとされた、『旧事紀』に関して少し調べてみました。『旧事紀』

のテキストとしては国史大系本や飯田季治『標柱先代旧事紀校本』が知られていますが、今回は大野七三氏の『先代旧事本紀訓駐』を利用して頂きました。その巻末には、大野氏が『旧事紀』の所伝をさまざまな伝承と照合し再編したと推認される系図が収録されていますが、そこには、元々めぐりで廻った神社に奉られている神々のほとんどが、素盞鳴尊の系統であることが示されており、スタツフ一同大いに参考となりました。

### ちなみに十月の元伊勢研修

や、来年度の青年研修会でも重要となってくる饒速日命、『旧事紀』の表記では天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊は、スサノオの系統として位置付けられ、聖師さまが「太

古の神の因縁」（『神霊界』大正七年二月号）において明かされた撞賢木敷御魂天疎向津毘売尊（撞の大神）というご神名は、『旧事紀』においては天照大神の諡名となつています。「太古の神の因縁」には「国常立之尊は太古における天照大神の位

地に進まれ、撞の大神は太古における須佐之男尊に降り玉ひて、天上天下修斎の大業を成就し給う時期と成れるなり」としています。

大本神話や聖師の言説と、『旧事紀』およびそれと関連する所説の付合については、まだまだ研鑽を深める必要があるかと思われまふ。これからのテーマとして別の機会に触れてゆきたいと思ひます。

また、『霊界物語』天祥地瑞・

七十三巻の総説に説かれているいわゆる「富士文庫」（富士古文書）には、神代において、「富士山」と、丹波地方の「桑田の宮」の二大神都があつたとする特異な伝承が記されていることも注目されます。

何よりもまず『霊界物語』を大切な根拠として資料を見る姿勢が私たちには大切であると思ひます。この研修を立案実施する過程で、本当に数多くのごことを学び、発見しました。今月号では、その一部を紹介させていただきます。他の学びは次号以下に順を追って発表させていただきます。思ひます。

江戸時代の俳人・軽森野楊は「亀山は蓬萊島か霧の海」と句を詠んでいます。

「蓬萊島」を目指したのは、秦

徐福ですが、誌上にて望月さんにより「丹波亀山」の元々めぐりに読者のみなさまをご案内いたします。

(出口恒・記)

## 一日目開講

素晴らしい秋晴れの下、愛善苑青年会企画運営の「元々めぐり」研修会が始まりました。

愛善苑会館で神前礼拝の後、責任役員の目崎五郎さんの挨拶があり、講座は企画担当の出口恒さんと、私・望月による各社についての紹介、テーマ解説から始まりました。

神教宣布の中心は、綾部ではなく亀岡にあることは聖師さまの『靈界物語』に明らかですが、それらの傍証を資料によって見えていきました。文献によれば

「桑田の宮」は、国常立尊の神都

とされています。伝承、旧事記訓註付属系図などを検証しながら神素盞鳴大神との関連性を考察していきました。

時間の都合で、八月号のQ&Aでご紹介した内容は、ある程度省略することになりました。

熊野館(愛善苑、また戦後大本のルーツ)

出口禮子さんから聖師様ご在世中のお話や、お庭についての貴重なお話をお聞きした後、皆で一緒に銚山神社に移動しました。熊野館の呼称は熊野大神(かむのぎくまのおおみくしのみこと)(神祖熊野大神奇御食野主尊)から来ていると思われませんが、また号を改めて論じたいと思います。また尽きぬ謎が秘めおかれていた聖師の神館であると考え

えています。

## 銚山神社

由緒書きによれば、古代、亀岡盆地が泥湖であったのを出雲大神が銚をもつて浮田の峽を切り拓き、湖水を干拓して肥沃な農地とされたということです。所伝によれば、出雲大神とは、スサノオの娘神である美穂津姫命(三女神の多紀理姫)とその夫神である大国主神を合わせ称した神名とのこと。出雲大神の神徳をたたえて、その銚をまつり銚山神社と名づけ、和銅二年(七〇九)にはじめて社殿が建立されたとあります。近くにはその昔、聖師様が修行をしたという矢田の滝があり、今も見ることができます。

## 二日目

瑞泉郷・郷神社・小幡神社

聖師様の生家跡が瑞泉郷です

が、はるか昔からここは「神縁浅からぬ地であったようです。小幡神社宮司・上田正昭先生によると、丹波から伊勢の外宮に豊受大神が遷座される際にここに立ち寄られ、爾来、このあたり一体が「宮垣内」と称されるようになった、とのこと。

豊受大神の社は、現在では神



上田正昭先生のお話

教顕現地である小幡神社の撰社・郷神社として犬飼川のほとりに鎮座しています。いわばこゝも元伊勢のひとつともいえそうです。そうした由緒の地で上田先生より神社の由来や秦氏のお話、聖師様ご在世中のエピソードをお聞きすることができました。豊受大神とは何か、神界の根本霊場・高熊山を含めて別の号で謎解きに挑戦したいと思います。

### 生身天満宮（元天満）

さて、穴太からマイクロバスで園部へ、目的地は生身天満宮です。

この神社について聖師さまはこう述べておられます。

「園部の郊外に生身天満宮と称へる日本最初の天満宮があ

る。劇寺子屋で有名な武部源蔵も同じく園部の人で、菅公配流の節、八男慶能君養育の内命をうけて幼君を伴ひ園部に帰つたのである。然るに幼き慶能君が父を慕ふ様子のいぢらしく、自らも敬慕の情やみがたく、手づから一の木像を彫刻し之を公と仰ぎ邸内に小祠を建設してその木像を安置し、之を生祠と名づけて奉仕したのである」（「生身天満宮」『玉鏡』八幡版三四五頁、天声社一九六頁）また「菅原道真だ。道真は王仁の分霊だ」（「忠勝『新月の光』上巻）、

「菅原道真を祭つて天満天神としてゐるのは、みろく様と菅原道真をいっしょに祭つて天神となるのだ」（「天満天神様」『新月の影』下巻）とも述べておられます。

この天満宮の創建者である菅原家代官・武部源蔵の末裔と伝えられる宮司さんに見送られて、次のスポット、南陽寺に向かいます。

### 南陽寺

聖師様が若年のころに、国学と和歌を岡田惟平翁に学んだという南陽寺は、生身天満宮からすぐのところへです。境内には、聖師様の歌碑が鎮座します。（第一次事件で破壊されるも、昭和四十年に再建。）お寺の応接間には、各ふすまに聖師様の書が表装されており、深いご縁を感じました。しばし拝観させていただき感銘に浸りました。

高野と伝わる千手寺です。こちらではご住職に有栖川宮熾仁親王の三代前の織仁親王が奉納された袍を見せていただきました。観音堂に掲げられた額も、織仁親王の書とのことで、有栖川家とご縁の深いお寺です。

空海が唐から帰国するに際して、密教を開くにふさわしい地を選ぶため、日本に向かつて独とつ鈷こを投げたところ、この地に着いていたとの言い伝えがあります。

「空海（弘法大師）と役の行者は良の金神様の生まれ変わりだ」と聖師は記しておられます。（「空海と役の行者」『新月の影』下巻）

### 独とこ抛なげ山ざん千手寺せんじゆじ（元高野山）

昼食ののち向かったのは、元

### 稗ひ田で野の神社

千手寺のある独鈷抛山を下る

と、そこが稗田野神社です。聖師さまによれば、『古事記』を口述した稗田阿礼は穴太の隣町、稗田野村の出身とのこと。和銅二年（七〇九）創建といえ、奇しくも鍛山神社と同じ年です。主祭神・保食命は豊受大神とご同神とのこと、丹波と豊受大神のご神縁の深さを改めて感じました。九月十九日、同社でも稗田阿礼の社殿を建立し、正式にお祀りすることになったとのこと、完成したばかりの社殿に拝礼いたしました。

盤榮稲荷宮（元稲荷）・清明神社  
通称、西山と言われる神奈備山には展望台がありますが、ここが鏡岩の場所だということ。亀岡盆地が一望できるすばらしい眺望で、左手には天恩郷



亀岡鏡岩にて

を望むことができました。境内には、岩が御神体として祀られ、和銅年間の社殿創建以前から、古い信仰が行われていたことが伺えます。

撰社の清明神社は、ここで若き日の安部晴明が修行し、稲荷の化身と思われる老人から天文の秘書を授かった、という伝説に基づき、昭和年間に創建されたとのこと。

であり、稲荷大神は聖師のお示しによると豊受大神です。

桑田神社  
二日目の最後は桑田神社です。保津川を見下ろす位置にあるこの神社のシンボルは、二匹の鯰でした。入口の手水も鯰の口から水が出るユニークな形状です。

初日に尋ねた鍛山神社と深い因縁があり、古代、湖であった亀岡盆地を、鍛山神社の御祭神である大己貴命（大国主の別名）とともに干拓した、大山咋命・大山祇命をお祭りしているとのことでした。

三日目  
愛宕神社（元愛宕）  
まずはマイクロバスに乗って

保津川を越え、少し山を登ったところにある元愛宕に参りました。ムササビが住むという鬱蒼とした森の中にひっそりとたたずむ社殿には、主祭神として伊邪那美命が祀られていました。

愛宕は秦氏の開いたもので、「白山」を開いたのも秦泰澄です。祭神は伊邪那美神（スサノオの母神）、大国主神（スサノオの御子神）。



出雲大神宮

尊が鎮まるといふ御神体山である千年山の麓には、「上の社」として素盞鳴尊が祀られています。正式参拝をさせていただくと共に、上の社に一同詣でました。この大神宮につきましては、大国主命の幸御魂、奇御魂をお祭りしています。出雲大神宮は太古の神都「桑田の宮」の本拠であったとされています。

(望月幹巳・記)



上の社 御祭神名

### 切り紙神示の実習

出口恒

#### 不思議な切り紙

二日目の夜のイベントとして、父、出口和明が晩年に研究しておりました「切り紙神示」を皆さんに紹介し実習して頂きました。

すでに『神の国』誌の読者はご存知かと思いますが、半紙一枚を一定の方式に折り、一剪の

もとに切り離すと、「火」と「水」

でカミを示す九枚の紙片が現れ、それを開くと「十字架」と八枚の紙片となり、神とアクマ、十字架とHELLEYやLOVE、タニワ、アヤベ、大本、出口、神、スクヒ十十字架、良、坤などの文字が一定のストーリーに沿って出てきます。ちなみに、私は王仁という文字も出ることを確認しています。

「切り紙神示」についてはいくつかの起源が想定されますが、そのひとつは、孝明天皇伝の「神示の占法」とされています。この伝は、一八六四年八月二十日の禁門の変の折、孝明天皇を戦火の危難からお救いした勤王力士隊の旭形亀太郎に「数表」「孝明天皇の遺勅」とともに託したと伝えられています。

それが旭形の愛弟子となった

佐藤紋次郎を経て、未決出所後の出口聖師に届けられたものと思われ、その関連資料が熊野館から発見されております。しかし実際には、聖師はすでに大正十年の段階で下記のように「切り紙神示」をご存知だったようです。

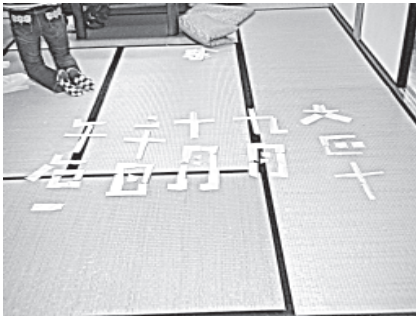
大正時代の大本機関誌『神霊界』に聖師が執筆された「掃き寄せ集」(大正十年一月一日号所載)の中で、この切り紙神示が「紙切宣伝」として紹介され、「さてこの二大勢力が衝突するのは何時かとみると明らかに大正十年九月二十日午後一時と出る」とあるのです。

同年の新暦十月(旧九月)予告どおりのその時、その日、その時刻に本宮山の神殿破壊が開



始された事実をみて、二大勢力の衝突とはこのことをさすことがすでに指摘されています。

私たちは「元々巡り」の初日、『大本の出現とそのあかし』という土井靖都先生（大本宣言使）の本の記載にならない、切り紙神示で本当に「大正十年九月二十日（新十月二十日）午後一時」という文字が出るか初めて試してみました。当日の切り紙神示の結果が左の写真です。



切り紙神示

### 審判の意義

切り紙から少々脱線ですが、

大正十年十月（旧九月）、大の字が正しくなる十（神）の年と十（神）の月。この年この月は、何を示すのでしょうか。『水鏡』（八幡版P二三七）には「靈界物語は最後の審判書」であるとしながら、「最後の審判は、天国に入り得るものと、地獄に陥落するものとの標準を示される事である。標準とは何か、靈界物語によって示されつつある神示そのものである。故に最後の審判は、大正十年十月より、既に開かれて居るのである」と書かれています。

大正十年新曆十月八日（旧曆九月八日）、この日付で京都府知事から出口聖師に対し、本宮

山神殿破壊にかかる呼出し状が来ました。九月八日の仕組です。ね。

「辛酉の紀元節、四四十六の花の春、世の立て替え、立て直し、凡夫の耳も菊の年、九月八日のこの仕組み。」（大正八年一月二十七日記、同年二月一日号『神靈界』所載）

辛酉の紀元節は第一次大本教事件の勃発、大正十六年（昭和二年）は第一次事件の解決。九月九日が重陽で菊（聞く）の節句、人が聞く前に知らせるといのが九月八日の仕組みです。本宮山神殿破壊にかかる呼出し状が来た同じ日、「神より開示しおきたる靈界の消息を発表せよ」との神勅が下りました。本宮山神殿の破壊と靈界物語の口述、そして最後の審判はシンク

ロナイズした関係にあったのです。現代もこの因縁は生きていくのでしょうか？

聖師によると、稗田阿礼が古事記を口述したのは、旧九月十八日とあります。（笑いの止まらぬ仕組み）『新月の光』下巻）『新月の光』上巻二六二頁に「稗田阿礼が出生したる隣郷に生れました王仁三郎は、何となく尊いような何となく為さねばならぬ、気がすまぬ様な気がして、牧畜業の傍らを比較的熱心に研究に従事しました為に、追々に深遠な義理が了解されて来て、終いには世界唯一の大極典（古事記）を詳解し得るまでに到るようになりました」とあります。

「いつの世にか稗田の阿礼の二代目が現はれて、靈界物語に

此ローマンスを針小棒大に書き

立て、名を竹帛に垂れ末代の語り草にして呉れるかも知れませぬよ、アハ、ハ、ハ、」(「花と花」

『靈界物語』十七卷・十二章)と稗田阿礼の二代目を自認する聖師です。

『古事記』などの古文献と『靈界物語』の関係を聖師は『靈界物語』四十一巻一章で次のように示されています。

「要するにこの靈界物語は東西両洋に於ける古典や神話に漏れたる点のみを補ふべく神様の命のまにまに口述編纂したものであります」

さて、九月十八日に回顧録などを口述された聖師ですが、切紙神示の示す二大勢力の激突の日は九月二十日(新十月二十日)であることに注目しま

しょう。

### 研修会と重なる数字

さて、切紙神示の実習でその日付が出たことに皆で驚きながら、ふと私は『靈界物語』一巻の冒頭である「序」を、何かに

導かれるように手にとりました。この『靈界物語』「序」は、「天地剖判のはじめより天の岩戸開き後、神素盞鳴命が地球上に跋扈跳梁せる八岐大蛇を寸断し……」で始まりますが、その

日付は、神を示す「十」の文字が三つ付く「大正十年十月(旧九月)二十日 午後一時」となっています。

ここに私たちは、『靈界物語』の中に切紙神示の示す年月日時刻、「掃き寄せ集」と同じ「時」を見、証しを確認することにな

りました。

普通、物語では口述時刻までは示されません。この神素盞鳴命と八岐大蛇なのか、二大勢力の激突は神の意志であり、旧九月十八日(新十月十八日)から始まり、まことに「最後の審判

が開かれた時刻は「大正十年十月二十日 午後一時」だったのでしょうか。

そして同日執筆された『靈界物語』第一巻の「靈界の情勢」では、聖師は「しかしながら従順な盤古大神は、神界に対するかかる反逆に賛同されないので、邪鬼の霊はみづから頭目となり赤色旗を押立てて、いろいろの身魂をその眷族に使ひつつ、高天原乗つ取策を講じてゐる」とさらりと書かれています。「高天原」とは「綾の聖地」で

しょうか。あるいは？

検察側の記録によれば、この日、一九二二年九月二十日(新十月二十日)、破壊は午前十一時から着手されています。しかし実際は、午前中は瑞垣の破壊に止どまり、午後一時より本宮

山神殿の破壊に着手したのと。聖師は本宮山神殿破壊と時を同じくして、破壊の音を聞き

ながら、『靈界物語』の冒頭「序」を口述されたのです。そして「赤色旗」とは天皇旗、いわゆる錦の御旗をさすのだろうか、感慨にひたり、いつしか話題は他に移っていきました。

そのとき、目崎五郎さんが私に声をかけ「元々巡りの始まったのは今日、平成二十一年九月二十日午後一時で、予定の参加者は皆さん集合していました



ね。しかも二十日と同じ二十人  
ですね。」と言われました。

私はあつと驚きました。「掃  
き寄せ集』『霊界物語』第一巻  
「序」と並ぶ、私たちにとつて三  
度目の「九月二十日午後一時」  
でした。

大正十年は西暦で一九二一年  
にあたります。平成二十一年九  
月二十日午後一時に「元々めぐ  
り」研修が始まりました。

それは、『霊界物語』『序』に  
記載されたように、神素盞鳴命  
が神々の祖でありルーツである  
証しを確認し、学ぶための研修  
会だったと思います。

西暦と和暦、新暦と旧暦の違  
いはあれ、共通する数字が並  
ぶ、王仁三郎により最後の審判  
が開かれた日と同じ日付。これ  
は偶然でしょうか。必然ではな

いでしょうか。神様のいかなる  
警鐘か、お導きか、皆で協力し  
て開催した研修会は神様のお導  
きのもとにあつたと、厳肅な思  
いに満たされました。

#### 稗田阿礼の新宮

さて、私は子供の頃、元明天  
皇が古事記編纂のために「稗田  
野村のアレを呼べ」と阿礼の名  
前の由来を紹介した記事を読ん  
だ記憶があります。私たちが創  
建千三百年を迎えた稗田野神社  
の境内に入ると人影を見かけた  
ので、洒落気を出して、「阿礼さ  
んのお家はどこかにありません  
か？」と訊ねてみました。  
その人は宮司さんで、「つい  
二日前の二〇〇九年九月十九日  
に稗田阿礼をお祭りする神社が  
出来たばかりです。」との返事



稗田阿礼社

でした。九が三つあるのも妙で  
すが、元々巡りの開始、九月二  
十日に間に合わすべく、神さま  
は稗田阿礼の新宮を準備されて  
いたのでしょうか。能天気かも  
しれませんが、衝撃的でハッ  
ピいなニュースでした。

日本最古の歴史書『古事記』、  
それらに書かれていないことを  
記したとされる最後の審判書  
『霊界物語』、『古事記』と『霊界  
物語』の作者がともに、「桑田の

宮」の桑田の字を冠する南桑田  
の亀岡に住み、その書物が同じ  
日付で、どちらも手書きでなく  
口述されたことに因縁を感じる  
のは私だけでしょうか。今後の  
研鑽も聖師さまの御守護を祈念  
しつつ、進みたいと思います。

閉会後のオブショナルツアー  
や今回紹介に洩れたエピソード  
などを、次回紹介させていただ  
きたいと思います。

『出放題』心に懸け時計、ほつ  
時計―捨て時計 柱時計―置い  
時計 大本も時の力で  
自然に謎時計―雪が時計』

〔『霊界物語』第五十九巻 聖師  
さま「余白歌」より〕

(出口恒・記) 編集委員校正